

新潟市潟環境研究所 第3回月例会議（概要）

日時：平成26年6月11日（水）午後3時～午後5時15分

場所：新潟市役所第1分館602会議室

■会議概要

1 報告及び情報提供

- ・潟環境研究所ホームページ「潟のデジタル博物館（仮称）」について（事務局）
- ・「じゅんさい池公園の生きもの観察と外来生物対策」に関するイベントについて（井上信夫 研究補助員）
- ・いくとぴあ食花開業記念イベント「とやの潟環境遊覧」について（事務局）

2 業務紹介 「水と土の文化推進課が行っている潟に関する取り組みについて」

（水と土の文化推進課）

- ・平成25年度は「潟学研究会」を立ち上げ、潟に関する有識者や潟で精力的に活動されている方々との意見交換を実施した。
- ・新潟市の個性を象徴する存在である「潟」の素晴らしさを、新潟デスティネーションキャンペーンの機会を捉え、より多くの人に知って楽しんでもらう目的で、4月19日（土）～6月15日（日）まで潟キャンペーン「水の潟ログ」を開催中。
- ・地域文化の魅力発信イベントに対する補助制度など、市民活動を支援していく。
- ・27年度に本市のアイデンティティである「水と土」をテーマに第3回目の芸術祭「水と土の芸術祭2015」を開催する。

3 講義「新潟県内の湖沼における水生植物相の変遷とこれから」

（志賀 隆 客員研究員/新潟大学教育学部准教授）

- ・水に浸かる頻度の違いで水辺に生育する植物の集団は変わる。一生のうち、ある時期に必ず水中環境を必要とする植物のことを水生植物という。水生植物は生育様式の違いから、おもに抽水植物・浮葉植物・沈水植物・浮遊植物に分けられる。
- ・水生植物（約200種）は3分の1以上が絶滅危惧種に指定されており、その中でも抽水植物以外の種が特に全国的に減少傾向にある。水生植物各種の生活史、遺伝的特徴を明らかにし、適切な保全活動を行っていく必要がある。
- ・佐潟、鳥屋野潟の水生植物は、水質・底質の悪化により1980年代後半から大幅に減少している。福島潟も国営干拓後に減少し、その後やや回復したが、緩やかな減少傾向にある。
- ・植物の種子は60年経過しても生理反応を確認できるものもあり、土壌中に含まれている種子（埋土種子）を用いて失われた水生植物の群落を再生できる可能性がある。環境が整った湖沼であれば、20～30年前に失われた水生植物を再生することができるかもしれない。
- ・福島潟は潟の内外でヨシ原・休耕田の掘削と排泥が行われており、これらの場所の植物相を調べることにより、埋土種子による植生回復の可能性を評価することができる。そのため、初夏から継続的に調査を行っている。
- ・福島潟には形成された時期が異なるヨシ原・開放水面が点在している。福島潟の埋土種子の構成と生存期間を推定するために、堆積の時期・環境が異なる土壌を潟内で収集し、発芽試験を行う予定である。
- ・初夏の植物相調査から、放棄水田を掘削してできた池において潟内で失われた水生植物が再生していることが明らかになった。埋土種子由来のものと考えられるものもあり、非常に貴重である。